明石秋室の詩・書・人物について(三)

佐伯　狩生熊義

(四)秋室の詩風

前回に続いてもう少し秋室の詩風を見よう。秋室が私淑していた鬼才李賀についての所見を自作の詩に示したものを考察したのであるが、今回は彼がどんな詩を作り、李賀の詩風をどのように自家薬籠中のものにしていたかを考察してみたい。

秋室の自作の詩は『南豊名家詩選』と『秋室遺稿』二巻にある百余首であるが、この前に「鄙稿」と称する草稿があり、更に「玉楼鬼訂」と称する天保六年（秋室四二才）刪藁の草稿がある。四一首で「鄙稿」は二三首である。此の二三首は「玉楼鬼訂」中に全部含まれている。鄙稿（自作の詩の謙称であろう）は自筆の草稿を帆足萬里に送って添削を依頼したものではないかという大胆な推定をしてみた。

理由は処々に添削の筆蹟が見られるのと、秋室が之に対して反論或は憤慨している書入れがあり、時にはそれによって好くなったと認めた意見の書入れがあったりしているからである。而も明瞭に帆足言という書入れから帆足某の意見ということになるが、当時帆足氏で秋室が添削を受ける程の人といえば萬里以外にはないという点から、大胆乍ら帆足萬里と仮定した訳である。口伝ながら秋室は萬里にその詩の添削を依頼したことがあるとのこと、而もその草稿を送った後で「この詩に一字でも添削して見よ」とつぶやき乍ら、私かに自信の程を示したということであるが、それを証するかの如くその添削に対して強い意見が間〻散見していて、殆どがその不当を論じている。例えば「秋郊鬼風謡」の中に飛露點身凝血

腥――の疑の字を凝の字に訂正したのに対し「本是れ疑字なるを帆足ンを添えたるは何故ぞ」と厳しい意見が書込まれて居り、作者の意向は飛露身に点じて血の腥きを疑うという気持であるのを凝とすれば凝血が腥いという意味でまるで別の意味になる。表現としては奇麗だが力強さが足りないということだろうか。――と反論はしてみても――抑も帆足萬里は秋室に長ずること十六才、当時南豊の学者中錚々たる存在で青年秋室の添削を依頼するにはふさわしい郷土の先輩という訳である。――只詩風は必ずしも一致した意見が出ない程異っていたと言えなくもない。

李賀のような特異な詩風に憧れている秋室と、古文辞学派の系統を継ぐ萬里とでは当然詩風が異ってくる筈である。

さて秋室の詩風についての本論に入る――我は慕う李王孫と只管李長吉に憧れて求めた詩風は、一言には言尽し難いが李賀の詩風と同じだと言えばよい。之を求めた多くの人々が遂には求め得なかったとも言われているが、宋の楊鉄崖、明の徐文長、『晞髪集』の著者謝翺等の人々が李賀の詩風を伝えていると言われるから、これらの人々の共通点と共通しているものを持っているのが秋室だと言えなくもない。

近頃中国を始めとして、米国の中国文学者バクスターや、英国の女流詩人たちが好んで比較するのがフランスのサンボリスト、ボードレールや、ベルレーヌなどの悪魔的、好奇的詩風と対比して深い親しみを持ちつゝあるようだが、或る共通点があるということは言えるが、直ちに結び付ける訳にはいかないのが李賀の特異な点だと思う。

天籟の声を聞くが如き李白の天才振りと、世上俗人の赤裸々な日常の喜怒哀楽を写実した杜甫の人才振りと比べて、李賀はやっぱり鬼才である。人界でも天界でもなく、鬼気迫るあの世の姿を慄然と感じさせる鬼界の才子である。鬼界と言っても、日本人の考えてる鬼（赤・青の裸体で角を生やし虎の皮の褌をした怪物）ではない。死者を呼んで鬼籍に入ったという、鬼気迫る不気味な超人間的なあの世の鬼界を意味するものである。

然し一歩誤れば牛鬼蛇神の怪物世界を意味することになって履き違えられ易い。

つまり過不足なく表現して妙味を出すので、甚だ言い

現わし難いが、そのような詩風が李賀の詩風だということであり、これが同時に秋室の詩風でもあるということである。

左様な不気味な詩風の代表として秋室の詩「秋郊鬼風謠」があり、また「髑髏」「燐」「狐嫁詞」「牟領訪古歌」「野遊」等々がある。

勿論この外にも同じくこの詩風が当然出ている訳である。まず(1)「秋郊鬼風謠」を――

鉄蒺藜沙鬼風吹　鉄蒺藜沙に鬼風吹く
鬼雄夜起発殺機　鬼雄夜起って殺機を発す
叱咤一聲風助威　叱咤一声風威を助く
吹出怪雲作黒旗　吹き出す怪雲は黒旗を作す
鉄馬隆々幾万蹄　鉄馬隆々たり幾万蹄
茅刀閃月殺聲来　茅刀月に閃いて殺声来たる
荒郊秋夜盛鬼気　荒郊秋夜鬼気を盛んにす
草際髑髏欲躍起　草際の髑髏躍起せんと欲す
土妖木魅惨無聲　土妖木魅は惨として声無く
飛露點身疑血腥　飛露身に點じ血の腥きを疑う
鬼風欲死東方白　鬼風死せんとし東方白む
鉄馬踏空去無跡　鉄馬空を踏み去って跡無し

浜菱の沙空に幽風が吹き、鬼雄が起上って殺気を漂わすと颯っと一陣疾風が起る、黒雲湧上って鉄馬が躍る、月に閃く茅刀、陰郊秋夜の舞踏――この時千万の髑髏が草場の陰から躍り出そうとし、地魅もうりょうは惨として声をひそめ、不気味な妖艶、露は散って身にかゝると思えば腥き血痕、鬼風が凪ぎ暁時近く、かき消す如く消えて跡もなし。

まさに一巻のミステリー映画、ゾッと夜明けの寒さ、肌に粟を生ず、幻想の世界、生けるが如く劇中劇に夢見る心地と感じる。

荒郊秋夜鬼気を盛んにす――飛露點身疑血腥の間四句がクライマックスであるがその構想は皆次の出典を踏まえている。鶴見山下作とあり、鬼風の題は孫星衍の句「鬼風吹簷断仏臂」に基き、風助威は黄山谷句「楷麻枯痒風助威」に基き、鉄馬隆々は李長吉の句「馬蹄隠耳聲隆々」に基き、茅刀閃月は徐文長の句「茆刀剪水嬌紅茜」に基き、飛露點身は長吉の句「悠々飛露姿」に基き、土妖木魅は張憲の句「土妖木魅作人立」に基き、鬼風欲死は孫豹人の句「楊花落地春風死」に基き、去無跡は長吉の句「夜聞馬

声暁無跡」に基いて作ったものだと自注を入れているのはさすがによく推敲をしたものである。

蒺藜沙空を後になって鉄蒺藜沙と改め、荒郊秋夜を後に陰郊秋夜と改め再び荒郊秋夜と改めている。鉄馬東空を鉄馬踏空と改めている。

自評最高の三ッ丸をつけているほど自信のある代表作というべきであろう。

(2) 髑髏

髑髏枯巧歳年遥　髑髏枯朽して歳年遥かなり
埋却無人委野嵩　埋却し人無く野嵩に委す
光露幾垂雙眼涙　光露幾たびか垂る雙眼の涙
茸苔又長一頭毛　茸苔又長ず一頭毛
妖狐戴去媚何巧　妖狐戴き去る媚何ぞ巧なる
侠客提来飲自豪　侠客提げ来り飲んで自ら豪
知有冤魂消不得　冤魂消え得ざるあるを知る
凄風苦雨夜嗷々　凄風苦雨夜嗷々たり

野に捨てられた髑髏と妖狐の媚態との対比は別世界の不気味さを表現、それに侠客は自若として独酌すれば幽魂は酸風に夜泣くという――思っただけで慄然とする。鬼趣に於て最も李賀に近しと評せられている。

光露を濃露と訂正したのに対し、必ずしも改作を要せずと杭弁しているが、何、巧、提の三字は改めて好を得たりと是々非々の態度を以て卒直に開陳している。此の訂正は恐らく帆足萬里の添削ではないかと思う。

(3) 燐　　鶴見山下作

走月没雲啼怪鴟　月走り雲没して怪鴟啼く
寒燐出土灼陰霏　寒燐出土し灼陰　たり
點々猶凝青血色　點々猶凝るがごとき青血色
熒々争放漆燈輝　熒々争って放つ漆燈の輝き
寂野時兼狐火動　寂たる野時に狐火の動を兼ね
荒塋或逐鬼車飛　荒塋或は鬼車の飛ぶを逐い
忽聴遠雞鳴喔々　忽を聴く遠雞鳴いて喔々たるを
精魂不語冷光微　精魂語らず冷光の微なるを

暗雲に月は走りて、ふくろうは啼き、寒燐が土から出て陰かに飛散り灼える時、點々と青血色、熒々と漆黒の燈火輝き、静寂の野に狐火が混じり飛ぶ、荒墳に鬼火は飛び散る真夜中の異様な世界――忽ち遠く雞鳴を聞いて、精魂は無言で光を薄らげ消えてゆく。

×　　×

髑髏と云い燐火と云い鬼趣に溢れた李賀体とも云うべきか。

燐と秋郊鬼風謡とは何れも鶴見山下作とあり、一連の髑髏も亦之と同時の作と思われる。

凛乎たる作者の覇気、青年大助の面目躍如たるを覚える。

(4) 飲古冢

一杯自飲一杯酎　一杯は自ら飲み一杯は酎ぐ
古冢前頭倒緑墫　古冢前頭に緑墫を倒す
酔臥不知春日没　酔臥して春日没するを知らず
野棠如雪照黄昏　野棠雪の如く黄昏を照らす

一杯先づ自ら飲み次いで一杯は墓前に酎ぎ古墳の前に酒樽を飲み倒し、酔うて野草に臥せば春の日暮も覚えず、白く野梨の黄昏に照らされる景色。

春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野を懐しみひと夜寝にけると詠んだ万葉歌人山部赤人のそれにも似ている。

この句は丙戌春の夕、夢に起二句を得たり続いて之を成すというから夢と現に相半ばして成立した。丙戌とは秋室三十四才少壮の意気盛んな時で、書物奉行として勉学の意欲に燃えていた時で、文字通り夢の中でも詩を作っていた訳であるが、実は佐伯文庫二万餘巻の献上書籍選出の大任を負うていた重大な時であった。――万葉歌人の長閑な心境どころではなかったのである。

只夢に得た起二句は極めて単純明快だが、覚めて推敲した後半はさすがに洗練された構成と色彩感覚の調和とは一段と妙境を表現した絶品であろう。

(5) 磨刀歌

我有昆吾堪制鐘　我に昆吾あり制鐘に堪う
三尺古波泣鬼工　三尺の古波鬼工を泣かす
玉装凋零不復佩　玉装凋零して復佩びず
壁塵埋却一眠龍　壁塵に埋却す一眠の龍
龍身久蔵龍文昏　龍身久しく蔵し龍文の昏し
紫花繡渋冷血痕　紫花繡は渋り血痕冷やか
十年重磨醒龍魂　十年重ねて磨き龍魂醒ます
光恠夜迸妖精蓐　光恠しく夜迸り妖精蓐く
今遭萬里戦塵静　今萬里戦塵の静まるに遭い
我且持此照身影　我且く此を持ち身影を照す

夏天雲黒雷雨垂　夏天雲黒く雷雨垂(なんな)んとせば
只恐蜿蜒破匣飛　只恐る蜿蜒匣(こう)を破って飛ばんことを

我に昆吾の名刀ありて鐘を切る、三尺の波紋は鬼工を泣かせたれど、華やかな玉装は凋落して今は佩びるに堪えず、匣底壁塵に埋却した一眠の龍（刀）も久しく蔵せられ紋様も昏(くら)し、紫花の刺繡も血痕に冷たく汚れ、一たび磨きをかければ、きらめく龍身、夜は光怪しく迸り、妖精が集い犇(ひしめ)くばかり、今や戦塵も静まり太平に遭い、我且(しばら)くこの刀身を持てど、夏雲は黒く、雷雨至れば、刀身が鞘を抜け出して蜿蜒と飛び去らんやも知れず。

と連想をたくましくすれば、或は此の世の外に飛び出してゆくやも知れずと夢幻の世界に誘い行く。

萬里の評によれば、起四句は宋以前の人々が賀郎を学んだ風に似て破砕の趣と、ある。

昆吾＝昆夷で造った名刀、吾丘衍の句「昆吾剪日吹剛風」に基く。

剬鐘＝温飛卿の句「健剣剬鐘鉛繞指」に基く、古波＝銭易の句「姦骨無痕古波艶」に基く、泣鬼工＝長吉句「千載石牀泣鬼工」に基く、龍身久蔵＝杜少陵の句「龍身敢久蔵」に基く、紫花繡＝徐文長の句「三年不磨紫花繡」、冷血痕＝長吉「暗麗萇弘冷血痕」に、醒龍魂＝長吉「鵜膏重淬醒龍魂」に又、長吉句「解持照身影」又「剣匣破舞蛟龍」に基いて出典を明らかにしている。

(6)徐文長集後　二首

奴視騒壇老主盟　騒壇を奴視す老主盟
山陰才気更超倫　山陰の才気更に超倫
勿訝豪端走光怪　訝(いぶか)る勿れ豪端走光怪(あや)しと
隴西長吉是前身　隴西の長吉是れ前身

詩壇を見下す老大家、才気煥発、超絶倫、光怪しく筆端を走るも訝(いぶか)る勿れ、隴西の李長吉がその前身なり。

×　×

高々山上鶏児飛　高々と山上の鶏児飛ぶ
此作殊勝諸作奇　此の作殊に勝れ諸作奇なり
解造神仙才鬼語　解造す神仙才鬼の語
人間惟有一天池　人間惟一天池有り

高々と山上の児鶏が飛ぶ如く、此の作は殊に勝れて諸作も奇あり、解造して常に新句を作る。人間界只一人の名手、それは文長（天池は文長の号）。

奴視＝袁中郎徐文長は当時所謂詩壇の主盟は文長、皆叱して之を奴と見下した

光怪夜走＝明人句「光怪夜走圓如仏」

隴西長吉＝長吉句「隴西長吉催頽客」

文長は跣になって洗い、梅花一萬梢作るに及んで頗る仙鬼の語に近付いたと云われ、特に高々山上の一作は異趣ありて、仙鬼の語中の最も信妙なるものと秋室は賞揚している。

(7) 狐嫁詞

この詩は子玉の作と対比して前回既に解説したので省略するが、宋の楊鐵崖の体に倣って作ったと秋室が自注しているのでこの詩の様なのを楊鐵崖風と考えこれが李賀の詩風と最も近いものの一つと考え、自らも之を目指していたという訳である。

× ×

以上概観して来た秋室の詩風を私なりに解釈して分類してみれば次の四種となる。

1. 李賀自身の体に学ぶ
2. 楊鐵崖の体に倣う
3. 徐文長の体に倣う
4. 秋室自身独特の体

その本流をなすものは勿論李賀である。之を倣い学んだ後世の人々百数十名あるがその中で特に楊・徐の両名は李賀の本領をよく把握している人々で、秋室は之を学びつゝ自らも工夫を加えて、自家の詩風を形成して来たのではないかと考えるのである。これで秋室の詩風の考察を一先づ終ることにする。

(五)『錦囊遺彩』について

前巻末尾に少々書いたが之は秋室の詩集ではない。従って著書ではない。編書である。

彼の好みと見識とによって李賀の風を慕い学んだ古人の作を取捨して二百六十二首にまとめたもので丙集と明示してある。

之を彼の自序に依れば歴代の諸家の詩三百餘篇を集めて四巻として『錦囊遺彩』と題したという。その中で丙集のみが残存しているが、他の三巻を甲・乙・丁集と推定して探し求めているが未だに不明である。而もその草

稿と思われる諸本の中にその題名の下に甲集と明記しているものが二首発見された。いよいよ乙、丁集というものがあるという推定は間違っていなかったように思う。三百餘篇の中から二百六十二篇を摘出したら残餘は少数になるからこれを三巻に分けるというのも成立理由が肯けないが、何が何でも探し出す事が先決問題だと思い、嘗て明石家から寄贈したという九州大学の図書館に、或はと思いついて預め上尾先生に調査を依頼しておいて、九大を訪ねてみたが徒労に終った。

丙集は佐伯市教育委員会の管理するところで所在は明確だが、他の三巻は未だに不明であるが佐伯の何処かに在るような気がしてならない。学術上貴重な文献となると思うので是非発見したい。大方の皆様のご協力をお願い致します。

さて本論に戻って秋室の自序を通覧すればこう書いてある。「李玉洲言長吉は楚詞より源を発した天才秀出だから後人が真似ても駄目」というのである。然し又言う「温李も長吉を效い俱に之を失う」と、温李とは温庭筠と李商隠である。――俱に艶体詩の名手、晩唐を代表する詩人でその作風は後世に大きな影響を与えた。――この二人の秀才でさえ長吉の風は学び得なかったのだから況や、張・碧・陳・陶・荘南・李咸用の輩をやと抹殺し、宋末の射皐羽の精巧さが時に之に近づき、楊鐵崖が極力之を求め、明の徐文長という一代の奇才が示した「陰風吹火」の一篇が、頗る工みであるけれども何れも李賀には及ばず、一関を隔てると断定している。――だから今さら『錦囊遺彩』など出しても無意味だと李玉洲は言うけれど李玉洲自身も、又葉大叔の如きも之に倣って頗る佳作あり、歴代の才人も之に倣っているではないか。真物は幾らも無くても、又彼の言う通り長吉は終に效う可からずともそれでよいではないか、今集める所をそのまゝ出してもよいではないか。というのが彼が出版する理由であり価値であるという訳である。

自序の意味は前述の通りだが、内容は決して軽卒に集めたものではさらさらない。

精密に吟味して集めた珠玉の名篇だが――そしてそれらは当時容易に入手出来なかった筈の珍本から抄出したものだろうが、佐伯文庫の目録を見ると成程と首肯出来る書籍が山とあったことを知る。『列朝詩集』とか『明詩帰』という天下の公著は勿論、『徐文長文集』とか『

即山集』、『鈍吟集』と云った私集的なもの迄比較してみれば佐伯文庫本の目録に皆載っている。

これらの書籍を通覧して抜群の記憶力を持っていた秋室が熟読した学殖は素晴しかったことであろう。

『錦囊遺彩』丙集の中の詩人は百十三名である。その中には秋室が評価している楊鐵崔・徐文長は当然含まれているが、その外の著名人といえば唐の荘南傑・宋の欧陽脩・明の高啓・李夢陽・袁宏道・清の袁枚・何紹基等錚々たる人々がある。

これらの著名詩人の詩に対して満足出来ないものがあったのか秋室は多少のクレームをつけている。

それは李賀に比べて不充分という意味だろうが、それでは李賀以外の詩人は皆駄目だというのかと云えば決してそうではない。

例えば李賀を始めて認めてくれた韓愈をはじめ、その友人で終生不遇だったが良い詩を作っていた孟東野などには、大いに敬意を表してその詩を熱心に勉強したのと、宋の蘇東坡・黄山谷等の人々の詩にも大いに敬意を表している。

『錦囊遺彩』丙集には半数以上は明人の詩を挙げている。次が元人三十名だが、李賀を学ぶに明人が元人より勝れていると云って「其の峭刻するを以ってなり」と理を説明している。峭刻とはきびしくはげしいという意味だが詩作態度が刻苦して求めるということであろう。宋以前はそれ程までになく、明以前として一括して呼ぶところを見ると、明人の作に特にその多くを期待しているようである。

毛利高誠公から詩を如何程覚えてるかと尋ねられた時、千首と答えて実は二千首と答えたかったと云った逸話も嘘でないことが解る。

（続く）